

## 終 章

古英語の時期の著しい語彙的特徴は、語形成における顕著な造語力であった。それは接頭辞あるいは接尾辞による付加によって新しい語を作り出すことであり、また同時に独立した語と語を合成することによって作り出される複合語である<sup>1</sup>。このような語形成は散文においても韻文においても自由にみられた。特に、複合語の形成は古英語においては極めて顕著な生産性(productivity)を示している。それは、韻文を作るための重要な手段(poetic compounding)であったからである。例えば、*Beowulf* では 3182 行に異なる複合語が約 1070 例現れている<sup>2</sup>。しかし、ノルマン人による英国征服の影響によって、中英語初期になると、この複合語の使用が減少し始める。例えば、*Beowulf* の約 5 倍の長さの同じ頭韻からできている *Lajamon* の *Brut* では約 525 ほどの複合語しか使われていない<sup>3</sup>。そして、時間の経過とともに、中英語では複合語の形成は単に詩作をするための「飾り」(poetic ornament)としての役割しか認められない場合が多くなる<sup>4</sup>。このように中英語期になるとあまり複合語が古英語期より頻繁にはみられなくなるのは、中英語の語彙に大きな影響を与えた古フランス語あるいはラテン語があまり複合語を用いる言語でなかったことにもよるのであろう<sup>5</sup>。

接頭辞による語形成をしてみると、古英語ではかなりの接頭辞が非生産的(unproductive)になり、さらには消滅していく場合もある<sup>6</sup>。古英語で約 34 種類の接頭辞が用いられていたが<sup>7</sup>、古英語から初期中英語にかけて広く用いられたのは *a-*, *be-*, *for-*, *to-*, *ge-*, *ymb-* などごくわずかであった。しかし、これらの接頭辞もやがてその生産性を失っていく。ただし、まったく消滅していったわけではない。例えば、古英語で基体である名詞や形容詞の意味と正反対の意を表していた *un-* (例えば、*unlytel*(=notably large)) は他の軽蔑的な(pejorative)な意(例えば、*uncræft*(=malpractice)) やあるいは単に意味を強める(例えば、*unfohrt*(=very afraid)) ために用いられていた。この接頭辞 *un-* は 14 世紀以降、おそらく古フランス語やラテン語の *in-* との混同によって、特にフランス語起源の接尾辞 *-able* をもつ語と付加する場合が多くなる<sup>8</sup>。

古英語で用いられていたこれら約 40 ほどの接頭辞の 4 分の 3 は中英語期まで残り、古フランス語やラテン語起源の接頭辞と共存することになる。英語本来の接尾辞もかなり中英語で生き残って使用されている。例えば、接尾辞 *-ful* は、もとは抽象名詞に付加して形容詞を派生していたが、やがて動詞と結合して形容詞を形成するようになる(例えば、*forgetful* (1382), *weariful* (1454))<sup>9</sup>。また、接尾辞 *-ish* は、本来さまざまなタイプの人を表す語などに付加していたが(例えば、*elvisshe*, *wommanisshe*)、14 世紀末になると色彩などを表

す語にも付加するようになる(例えば、yellowish (1379), greenish (1384), reddish (1398), darkish (1398), bluish (1400))<sup>10</sup>。

古英語から中英語における接頭辞、接尾辞、あるいは複合語の使用状況はだいたい以上のものであるが、チョーサーの英語ではどうであったのか。チョーサーの接頭辞、接尾辞、複合語の詳しい内容はすでに、それぞれの章の終わりで述べているので、ここではチョーサーの語形成全体を簡単に要約するにとどめたい。

まず接頭辞であるが、チョーサーでは a-, arch-, be-, co-, counter-, de-, dis-, en-, enter-, ex-, for-, i-, in-, mis-, non-, of-, pre-, re-, semi-, sub-, sur-, to-, un- の 23 種の接頭辞が使われている。このうちの a-, be-, for-, i-, mis-, of-, to-, un- の 8 種類のみが英語本来の接辞(あるいはゲルマン語系)である。ということは、チョーサーではやはり古フランス語およびラテン語起源の接辞が多く使われていることになる。しかし、これらの接頭辞の中でどの接頭辞がもっとも多くの派生語を形成しているかという観点からみれば、英語本来の接頭辞 un- が多くの派生語を形成していることになる。un- 以外の英語本来の接頭辞も be-, for-, mis- などかなり多くの派生語を形成し、英語の語彙拡大に貢献している。一方、古フランス語またはラテン語起源の接頭辞では re- がもっとも多くの派生語を作り出しており、次いで dis-, de-, in-, en- などとなる。

チョーサーに使われている接尾辞で名詞を派生するものとしては -age, -al, -ance, -ant, -at, -dom, -er, -ess (1), -ess (2), -ery (1), -ery (2), -(e)ster, -et, -hood, -ion, -ing, -ist, -ity, -ment, -ness, -our, -ship, -ster, -th, -ure の 25 種類が使われている。このなかで -dom, -er, -(e)ster, -hood, -ing, -ness, -ship, -ster が英語本来の接尾辞である。このうち -ing が圧倒的に多く 477 語の派生名詞を形成している。ついで -er の 130 例、-ness の 118 例となっている。反対に、-dom, -ship, -ster などその生命力を失いつつある。古フランス語あるいはラテン語系の接尾辞では -ion が最も多く 186 の派生名詞を形成している。次いで -ance の 85 例、-ity の 71 例、-our の 70 例と続いている。反対に、-al, -at, -ery, -ist, -th にはあまり生産性は認められない。

形容詞を派生する接尾辞は -able, -al, -ant, -ary, -ed, -ful, -ic, -ing, -ish, -ive, -less, -ly, -ous, -som, -y の 15 種類である。このうちで英語本来の接尾辞 -ed と -ing が最もおおくの形容詞を派生している。反対に、-som はその生産性がきわめて低い。一方、古フランス語あるいはラテン語起源の接尾辞では -ous, -able, -al, -ant は高い語形成能力を示している。反対に、現代英語では比較的よくみられる(例えば、functionary, specific) -ary, -ic はまだ生産性はかなり低いようである。

チョーサーでは、副詞を派生する接尾辞は -e, -les, -ly, -ward の 4 種類しか使われていない。このなかで、-ly 以外はほとんど生産性がない。

動詞を派生する接尾辞は -en と -ify の 2 種類のみであり、その語形成能力もきわめて低いものである。チョーサーの場合ばかりではなく、中英語、近代英語そして現代英語においても動詞を派生する接尾辞はほとんど見られない<sup>11</sup>。

以上、チョーサーにおける接頭辞と接尾辞について数値的なことばかり述べたが、これらの接辞がどのような意味で用いられているかは各項目で触れているのでここでは繰り返さない。ただ、チョーサーの時代には古フランス語やラテン語が当時の英語に大きな影響を及ぼしたといわれているが、必ずしも古フランス語などの外国語に完全に「征服」されたわけではなく、例えば、英語本来の接辞の中で名詞を多く派生している接尾辞には *-er*, *-ing*, *-ness* などがあり、形容詞を頻繁に派生する接尾辞には *-ed*, *-ing*, *-ful* などがある。

次に、ゼロ派生語についてみてみよう。チョーサーでは 275 例のゼロ派生語が使われている。ゼロ派生の型としては「名詞 → 動詞」、「動詞 → 名詞」、「形容詞 → 動詞」があるが、最も多いのは 155 例の「名詞 → 動詞」である。ここでも、チョーサーの時代には古フランス語やラテン語の影響があることは当然である。従って、*[+latinate]*の素性をもつ語(148 例)がゼロ派生語に使われている場合が多いのであるが、*[-latinate]*の素性をもつ語(136 例)、つまり英語本来の語もかなりゼロ派生語として用いられている。さらに、なぜゼロ派生、特に「名詞 → 動詞」の型が多いかという問題であるが、これはやはり中英語においても動詞を派生する接頭辞や接尾辞はあまりないということによるのであろう。事実、チョーサーでは接尾辞の章で述べたように、動詞を派生する接頭辞はわずかに 2 種類である。従って、競合する接尾辞はほとんどないのでゼロ派生語を生じ易い言語学的環境にあると言える。ただし、チョーサーでは名詞や形容詞を派生する接尾辞が存在するにもかかわらず、「動詞 → 名詞」の型もかなり使われている。このことは、チョーサーが自らの英語を創造するのにゼロ派生を効果的に使用したとも考えられる。

チョーサーは作品の大部分を韻文で書いているので、その詩法としての脚韻が語形成にある程度影響したと考えられる(第 4 章参照)。チョーサーの作品には翻訳作品もあり、この場合は原典からの影響で新しい語を派生させた例もあるが、彼自身の創作作品においても押韻の必要から彼独自の語を形成している場合もみられる。

チョーサーの語形成における生産性については、各章でもある程度言及しているが、第 5 章で特に *-ness* と *-ity* の生産性を取り扱った。ここで、さまざまな要因から英語本来の接尾辞 *-ness* の方がかなり生産性が高いことを指摘した。また、第 5 章で取り上げてはいないが、英語本来の接尾辞 *-ing* の生産性が極めて高いのはなぜか。さらに、同一の意味を表す複数個の接尾辞(例えば、*-al*, *-ion*, *-ment* など)の中で特定の接尾辞のみが他の接尾辞よりも生産性が高いのはなぜかという問題がある。なお、生産性の概念についてはすでに第 5 章で言及しているが、生産性の度合いについて言えば、ある接辞が統語的、意味的、形態的に規定された基体とどの程度自由に付加されるかという問題もある。さらに、他の接辞、例えば *-er* は *-our*, *-ant* など他の接尾辞やゼロ派生とどのような競合関係を示しているのか、といった問題についても調査・分析する必要がある。

最後に複合語についてであるが、チョーサーでは、複合名詞、複合形容詞、複合動詞などが使われている。その中でも最も多いのは複合名詞である。そして、古フランス語の影響が大きい時期であるにもかかわらず、複合名詞、複合形容詞の場合もその構成要素とし

ては英語本来の語あるいはゲルマン語系の語がはるかに多く使われているということは興味深い事実である<sup>12</sup>。

本論考ではチョーサーの接頭辞による派生語、接尾辞による派生語、ゼロ派生語、そして複合語について詳細な記述を試みた。この過程で、古フランス語あるいはラテン語がチョーサーの語形成にどのような影響を与えているかについても不十分ながら言及をした。しかし、まだ多くの課題が残されている。例えば、接辞のなかでも、re- 派生語と re- と同じ意味を表す 'again' の意を表す語あるいは again を含む構文との競合、un- 派生語と同じ否定の意を表す語を用いた表現との関係、人を表す接尾辞 -er と he who ... 構造との関係、形容詞を派生する -ish, -ous, -ly, -ful の相互の関係などについても調査する必要がある<sup>13</sup>。また、派生語と項構造の関係、例えば、-er 派生名詞(2.2.7.7 節参照)や -ing 派生名詞 (2.2.16 節を参照) が動詞の補部に相当する of 前置詞句や付加語とどのように共起するかという問題である<sup>14</sup>。さらに、英語史におけるチョーサーの語形成の位置づけを検討する上で、チョーサーと同時代の作家の作品に用いられている派生語や複合語との比較、散文と韻文に使われている派生語や複合語との比較、創作作品と翻訳作品における語形成の比較研究が必要である。また、すでに序章で言及したが、認知言語学に基づいた語形成研究の成果があるが、さらに通時的な語形成研究に認知言語学が貢献することが期待される<sup>15</sup>。

- 
- 1 Scheler (1977: 14) を参照。
- 2 Burnley (1992: 441) を参照。
- 3 初期中英語期の複合語の研究には Sauer(1985) がある。Sauer は初期中英語のさまざまなテキストから集めた複合語の用例を、形態的基準 (構成要素の品詞による分類など)、統語的基準、意味的基準に区分して詳細な分析・記述をおこなっている。
- 4 Burnley (1992: 441) を参照。
- 5 Bradley (1968: 58) を参照。
- 6 Burnley (1992: 446) を参照。
- 7 Quirk and Wrenn (1957: 109-14) を参照。
- 8 Burnley (1992: 446-7) を参照。
- 9 Burnley (1992: 447) を参照。
- 10 Burnley (1992: 447) を参照。
- 11 Marchand (1969: 318) によれば、中英語で +ize ([+latinate]) の例が最初に見られるのは baptize (1297) である。また、ウィクリフでは au(c)torize, canonize, evangelize, sabbatize, solemnize といった動詞が使われている。シェイクスピアでは +ate ([+latinate]) (例えば、evitate 「避ける」、runinate 「破壊する」)、+ify ([+latinate]) (例えば、amplify 「拡大する」、beautify 「美しくする」)が見られる (Brook (1976: 134-5) を参照)。また、現代英語では +ate ([+latinate]) (例えば、separate, advocate), +en ([-latinate]) (例えば、blacken, strengthen), +ize ([+latinate]) (例えば、crystallize, modernize) などがある (桑原他 (1985: 458-9) を参照)。
- 12 Sauer (1992) は古フランス語の影響は英語の複合語形成に必ずしも不利に働いたとは言えないと述べている。例えば、「動詞命令形 + 名詞」(例えば、wesche-disch (=wash-dish, kitchen-boy))、「重複複合語」(例えば、gale-gale (=chatterbox)) などの複合語の型は古英語には見られなかったものであり、古フランス語の影響下で生じたものだという。
- 13 Görlach (1978: 83-4) を参照。
- 14 古英語における派生名詞の項構造との関係を論じた研究に児馬 (2000) がある。また、現代英語 (日本語との比較をしながら) についてはあるが、島村 (1996) では mental lexicon という観点から派生と項構造の関係が論じられている。
- 15 Kastovsky (1997: 79-80) は次のように述べている。

“Since in the following I will look at the way in which word-formation theory has been influenced by such general trends, and since cognitive approaches to word-formation are still rare and have not yet resulted in a more comprehensive framework, I will concentrate on the dichotomy [=sign-oriented vs. form-oriented] mentioned in the title, and will leave the idealistic, concept-oriented trend out of consideration .....”